

中等歴史教育における「戦争」の教育内容開発（Ⅱ）

— 小単元「近現代日本の諸戦争」の場合 —

森 才三

前稿¹⁾において、筆者は、これまでの近現代日本の諸戦争を扱った授業には「戦争の受動者・被害者としての関係者」という視点から戦争を捉える授業が多いこと、そして、それは「民主主義社会の建設」を「戦後社会の変革と再建」に置き換える捉え方に由来することを指摘し、今日の民主主義の新しい捉え方として「批判的民主主義」を提案した。本稿では、「批判的民主主義」の主体を育てるという社会科目的観に立ち、その当事者としての「戦争を起こした当事者の責任を受け継ぐ関係者」という視点から、近現代日本における戦争という行為の論理構造を解明する高等学校「地理歴史科」の教育内容の開発に取り組み、その授業試案を教授書の形式で提示する。

1. はじめに

21世紀を目前にした1999年5月、オランダでハーグ平和とアピール市民社会会議が開かれ、「21世紀の平和と正義のためのハーグ・アジェンダ」が採択された。20世紀を振り返ると、20世紀は、第一次世界大戦、第二次世界大戦、そして冷戦による諸紛争と続き、まさに“戦争の世紀”だったことに改めて気づく。ハーグ・アジェンダは、こうした20世紀の負の遺産を21世紀に継承しないように、戦争をなくし「平和の文化」を実現するための、4つの柱からなる21世紀の行動の指針を示したものである²⁾。その第1の柱として「戦争の根本的原因と『平和の文化』」を提起されているが、まず戦争を引き起こした「暴力の文化」を追究し、戦争の「原因」を解明することが、「平和の文化」への道程の第一歩であろう。

本稿では、こうした問題意識を新たなインセンティブに、前稿が残した課題である近現代日本の諸戦争の「原因」を解明する高等学校「地理歴史科」の教育内容の開発に取り組み、その授業試案を教授書の形式で提示する。

2. 「行為の論理」構造を解明する授業開発の意義

筆者は、前稿において、「なぜ〜か？」型の授業を3つに類型化した³⁾が、これを戦争の「原因」を解明する授業にあてはめると、「原因」をどこ求めるか、どんな説明を求めるかによって、戦争の「原因」を解明する授業は、次の【表1】のように分類される。

【表1】「原因」を解明する授業の類型

| 類型 | 解明する対象 | 求める説明 |
|----|-----------|-------------|
| A | 「社会や時代」構造 | 因果的説明(十分条件) |
| B | | 因果的説明(必要条件) |
| C | 「行為の論理」構造 | 目的論的説明 |

戦争を引き起こした「暴力の文化」は、表1にしたがうと、戦争を引き起こすに至った「背景や条件」すなわち「社会や時代」構造と、戦争をした「意図ないし意思」すなわち「行為の論理」構造、の2つに集約して捉えることができる。このうち、前者を解明の対象とする授業がタイプA・タイプBであり、後者がタイプCである。これらタイプA～Cの授業により、「暴力の文化」の諸相を明らかにすることができる。

本稿では、近現代日本の諸戦争について、Cのタイプの授業の教育内容の開発に取り組みたい。それは、以下の二つの理由からである。

一つは、これまで紹介された授業に、Cのタイプの授業があまり見あたらない、ということである。社会科には依拠する社会科観や授業論によって様々な形態の社会科がある³⁾が、「なぜ〜か？」型の授業を代表する社会科として、「原因」の解明を通して科学的な知識の習得をめざそうとする「社会科学科」がある。近年の優れたその授業として、日本近現代史にかかわるものをあげると、以下のものがあげられる。

- ① 原田智仁「高等学校日本史の教材開発—小単元「日米開戦への道」教授書試案—」（全国社会科教育学会『社会科教育論叢』42集，1995年，pp.90～101）
- ② 井上明洋「日本近現代史の授業改革—「開発独裁国家」教授書—」（全国社会科教育学会『社会科研究』第53号，2000年，pp.23～32）
- ③ 宇都宮明子「現代社会の考察をめざす日本史授業開発—総力戦体制の批判的学習を通して—」（全国社会科教育学会『社会科教育論叢』第46集，2007年，pp.80～85）

①は戦間期の日本の内外体制を黒沢文貴の研究に依拠して構造的に理解しようとする実践試案であり、典型的なタイプAの授業である。また、②は戦前の日本社会の構造を「開発独裁」モデルで捉えようとする実践試案、③

は日本の近現代史を「総力戦体制」モデルで捉えようとする実践試案であり、いずれもタイプAとBの混淆タイプに分類される。ここで、②・③をAとBの混淆タイプとしたのは、②・③においては、「なぜ～か？」と追究する因果的説明が、十分条件の説明なのか、必要条件の説明なのか、意識して分けられていないからである。実は、「社会科学科」の授業のほとんどは、AのタイプもしくはAとBの混淆タイプであり、Cのタイプはあまり見かけない。それは、事実認識を主たる守備範囲とする「社会科学科」においては、価値認識の領域に立ち入るCのタイプは「社会科学科」の仕事ではない、と見なされたからである。一方、「市民社会科」は、確かに事実的認識のみならず価値的認識までを守備範囲とするが、そのメインは正当性を議論する価値判断であり、そこではCのタイプの授業はメインを導出するための、授業の単なる一過程に矮小化されてしまう。つまり、事実的認識と価値的認識との間に一線を画して社会科の守備範囲を考えようとする捉え方のなかで、Cのタイプの授業は「社会科学科」からは排され、「市民社会科」では軽んじられてきたわけである。かくして、「社会科学科」ではCのタイプの授業はあまり見かけないのである。こうした状況に対し、筆者は、「事実的認識か、価値的認識か」という学習対象の観点のみならず、「分析か、反省か、代案か」という学習方法の観点も取り入れて「社会科学科」を再定義し⁴⁾、Cのタイプの授業を新しい「社会科学科」に加え、その教育内容開発にあたりたい。ただし、新しい「社会科学科」において「行為の論理」構造を分析する場合、その対象となる“行為”とは、社会性と歴史性とを帯びた超個人的な“行為”であり、人のなす行為一般ではない。Cのタイプの授業の教育内容を開発する意義の一つは、これまでの社会科教育実践の空白を埋めるものといえよう。

もう一つは、Cのタイプの授業なくしては、私たちは「戦争を起こした当事者」の関係者という意識を持ち得ない、ということである。筆者は、前稿において、次の2つのことを指摘した。すなわち、— ①戦後なされてきた戦争の授業は「戦争の被害者としての関係者」の視点からのAのタイプの授業であり、「戦争を起こした当事者」の視点からの授業は見られない。②それは、民主主義社会の建設を「戦後社会の再建と変革」と捉える考え方、あるいはその後に出てくる「反映的民主主義の形成」と捉える考え方に由来している。— という2点である⁵⁾。「戦後社会の再建と変革の当事者」あるいは「反映的民主主義形成の当事者」という捉え方は、新しい社会の建設（「戦後社会の再建と変革」や「反映的民主主義の形成」）のために、「なぜ戦争は起きたのか？」と問いかけ『社会や時代』構造のどこに問題があったの

か？」を解明していこうとする。それは、「戦争の被害者としての関係者」という視点からの授業であり、「戦争を起こした当事者」の視点からの授業ではない。誤解を恐れずにいえば、未だに戦争責任や戦後責任の問題をめぐって議論が絶えない理由の一端はここにあると考えられる⁶⁾。戦後60年を過ぎ、世代は交代し、誰も「戦争を起こした当事者」にはなりえない。そして、過去は遠くなればなるほど、過去を見る視点は当事者から関係者へ、関係者から観察者へと変わっていく。しかし、私たちは「戦争を起こした当事者」にはなりえないが、「戦争を起こした当事者」の責任は受け継がなければならない。いま戦争を捉える視点が年々関係者から観察者へと傾いていくなか、それを引き戻し「戦争を起こした当事者の責任を受け継ぐ関係者」の視点を可能にするものが、Cのタイプの授業ではないだろうか。

このように、Cのタイプの授業の教育内容開発には、社会科教育実践の空白を埋める、近現代日本の諸戦争を「戦争を起こした当事者の責任を受け継ぐ関係者」という視点から捉えることができる、という意義が認められるのである。

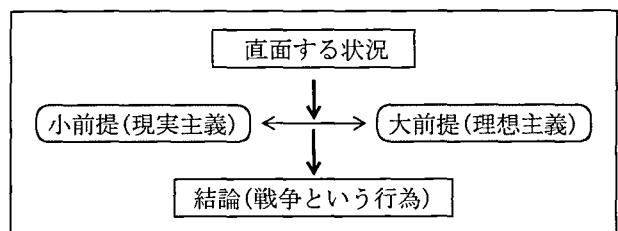
3. 小単元の内容構成

(1) 内容構成の基本的枠組み

戦争は、国家ないし為政者が外交政策という形をとってなした“行為”，と見ることができる。そこで本稿では、近現代日本が引き起こした6つの戦争（日清戦争、日露戦争、第一次世界大戦、満州事変、日中戦争、太平洋戦争）を、外交政策としての“行為”と見立て、その論理構造を解明する小単元の授業を開発する。

一般に、“行為”は「大前提（共同体の価値的・実践的原理）+小前提（状況判断）→結論（行為）」という三段階の実践的推論に拠りなされる。したがって、「行為の論理」構造とはこの実践的推論の構造にほかならず、それを解明する授業はこの実践的推論を逆に辿りながら展開することになる。また、国際政治は〈軍事力〉・〈経済力〉・〈価値〉の3つの要因から捉えるのが常道であり、外交の要因には「現実主義」と「理想主義」の2つがある。これらを手がかりに、国際政治の要因と外交の要因とを重ね合わせ、それを実践的推論の大前提・小前提に対応

【図1】戦争という「行為」の基本的な枠組み



させて、前頁の【図1】のような枠組みを設定する⁷⁾。

これを基本形として、近現代日本が80年間になした諸戦争(日清戦争, 日露戦争, 第一次世界大戦, 満州事変, 日中戦争, 太平洋戦争)に当てはめ, それを1つ乃至2つのパートとして小単元を構成する。加藤陽子は, 近現代日本の諸戦争について, 「なぜ日本は戦争をしたのか?」という問いを反復的に立て, 「為政者や国民がどのよう

な論理の筋道で, それぞれの戦争を受けとめていったのか」を明らかにするという注目すべき研究を行っている。このような加藤をはじめとする日本近現代史研究の成果⁸⁾に学んで, 近現代日本の諸戦争に関する学習内容を抽出し, 前頁の【図1】の枠組みに従ってそれらを整理したものが, 次の【図2】である⁹⁾。

【図2】小単元の枠組みと学習内容

| | 現実主義(小前提)…軍事力と経済力 | 近現代日本の諸戦争 | 理想主義(大前提)…価値 |
|-----|-------------------|--|--|
| II | 新興弱小国としての安全保障の確保 | 利益線(朝鮮)の確保 ↓ [日清戦争] | 「朝鮮の改革を拒絶する保守の国」清国 「改革を進める開化の国」日本 |
| | | ロシアの動向 ↓ [日露戦争] | 「文明の敵・野蛮の国」ロシア 「文明の国」日本 |
| III | 新興弱小国から後発帝国主義国家へ | 日露戦争後の諸問題(中国権益の確保) ↓ [第一次世界大戦] | (日英同盟の情誼) |
| IV | 後発帝国主義国家としての発展 | 国際協調と軍縮の風潮 対米総力戦への対応 ↓ [満州事変] | 「条約を守らない」中国 「条約を守る」日本 |
| V | 東洋の超大国 | ソ連の脅威 ↓ [日中戦争] | 「東亜新秩序に反対する」中国とそれを応援する欧米列強 「東亜新秩序の盟主」日本 |
| | | 資源の確保(南進) ↓ [太平洋戦争] | 「大東亜新秩序に反対する」中国とそれを応援する欧米列強 「大東亜新秩序の盟主」日本 |

(II～Vは, 小単元のパートにあたる。)

(2) 学習内容の構成

小単元は, パートI(導入), パートII～V(展開), パートVI(終結)の6つのパートで構成されている。パートIは, ①これからの学習へ向けて関心を持たせ意欲を高めること, ②「なぜ日本は80年間にこんなに多くの戦争をしたのか?」を導出し, そのことを考えるための「現実主義」や「理想主義」などの枠組みをおさえさせること, の2つをねらいとする。①については, 「日本の戦争責任・戦後責任」について討論させ, 関心と意欲を喚起させるとともに, 近現代日本の戦争について考える出発点として「なぜ日本は80年間にこんなに多くの戦争をしたのか?」という学習課題を導出する。また, ②については, 中江兆民の『三酔人経綸問答』¹⁰⁾から明治国家における三つの将来展望を確認し, 戦争という外交政策を考える枠組みとしての「現実主義」「理想主義」を確認する。

そして, パートII～Vでは, その枠組みに基づいて, 図2のように, 近現代日本の6つの戦争(パートIIは日

清戦争と日露戦争, パートIIIは第一次世界大戦, パートIVは満州事変, パートVは日中戦争と太平洋戦争)について, それぞれ「なぜ日本は〇〇戦争をしたのか?」という問いを反復し, それぞれの戦争という行為の論理構造を解明していく。

さらに, パートVIでは, パートII～Vでの学習を図2に抛りながら整理し, それぞれの戦争の時点における日本の国際社会における位置(新興弱小国, 後発帝国主義国, 東洋の超大国)をおさえつつ, 日本が戦争を起こすに至った「現実」とそれを根拠づける「理想」を確認して近現代日本の諸戦争の論理を明らかにするとともに, その論理がアンヌ・モレリの〈戦争プロパガンダ10の原則〉¹¹⁾のどれに該当するのかを考えさせ, あらためてパートIで提起した「日本の戦争責任・戦後責任」について生徒自身の考えをまとめさせて, 授業を締めくくる。およそ小単元はこのように展開するが, 以下に開発した授業試案を提示する¹²⁾。

4. 小単元「近現代日本の諸戦争」教授書試案

1. 目標 近現代日本が行った諸戦争の理由を、現実主義と理想主義の視点から分析し、近現代日本の戦争の論理を解明する。

2. 小単元の構成

| | | |
|--------|--------|--|
| 導入 | パートI | “新興弱小国家”日本の課題と針路・・・・・・・・明治国家はどんな課題を背負っていたか、どんな針路があるだろうか？ |
| 展 開 | パートII | 明治国家の課題と日清・日露戦争・・・・・・・・なぜ、日清・日露戦争をしたのか？ |
| | パートIII | 「国運の天佑」第一次世界大戦と大戦後の課題・・・・・・・・なぜ、第一次世界大戦に参戦したのか？ |
| | パートIV | 「不安」な戦後から満州事変へ・・・・・・・・なぜ、満州事変を起こしたのか？ |
| | パートV | 事変後の課題と日中戦争・太平洋戦争・・・・・・・・なぜ、日中戦争・太平洋戦争をしたのか？ |
| 終結 | パートVI | 近現代日本の諸戦争の論理と〈戦争プロパガンダ10の原則〉・・・・・・・・日本の戦争責任・戦後責任についてどう思うか？ |

3. 小単元の学習内容

A. 学習内容の枠組み（前掲【図2】小単元の枠組みと学習内容）

B. 学習内容

※ 学習内容の(1)～(6)は、それぞれパートI～VIに対応している。

- (1) 帝国主義国家が凌ぎあうなかに誕生した明治国家は“新興弱小国”であり、いかにその安全保障を確保するかが第一の課題であった。そうした明治国家の針路として、南海先生のような考え方(現実主義)、洋学紳士のような考え方(理想主義)、東洋豪傑君のような考え方(超現実主義)の3つがあった。
- (2) 近代日本は、その出発点において「西洋列強の外圧の中、弱小新興国がいかにして安全保障を確保するか」という課題に直面したが、そうした課題に対し、日本は現実主義的・機会主義的に対応し、日清戦争、日露戦争を行った。
 - a. 日本にとって朝鮮は「利益線」であったが、それを守るためには朝鮮の独立が確保されなければならない、清国と朝鮮の宗属関係はそれを阻害するものであった。そのため、日清の対立は「朝鮮の改革に熱心な国」対「朝鮮の改革を拒絶する国」、つまり「開化」対「保守」という論理で説明され、日本は日清戦争を戦った。
 - b. 日清戦争後、日本の勝利に危機を感じたロシアは中国に勢力範囲を確保した。しかし、それはイギリスの反発をよび、日本にとっても死活的な危機となった。日本は、イギリスと同盟を結ぶなどロシアとの戦争を周到に準備し、日露の対立は「文明」対「野蛮」という論理で説明され、日露戦争を戦った。
- (3) 近代日本は日露戦争後様々な課題に直面したが、第一次世界大戦をそうして課題に対する「天佑」とみなし、日英同盟を口実に積極的に参戦した。それによって諸課題は解決したが、日米関係の悪化・日本の国際的な孤立化の懸念という新たな課題が生み出されるとともに、これまでの日本の現実主義的な帝国主義外交のあり方も問い直しを迫られ、国際条約を盾に相手の非理を追及する原理主義的な外交姿勢も萌芽した。
- (4) 近代日本は、第一次世界大戦後、「国際協調と軍縮」の思潮のなかでアメリカを仮想敵国として「総力戦と経済封鎖」に備えなければならぬという現実と直面した。それらの現実に対して、日本は「対米7割の大型巡洋艦」あるいは「一厘の金もださない」戦争という方針で対応したが、結局満州事変を招来することになった。
 - a. 日本は、大戦後、初めは「対米7割の大型巡洋艦」を前提に2年以内の短期決戦を想定してきたが、ロンドン軍縮条約で「対米6割」の線で押し切られて短期決戦の前提が覆され、対外的な危機意識が生まれることになった。
 - b. こうした国家の安全の脅威という現実に対して、「中国を根拠地として戦争し、戦争によって戦争を養う」という「一厘の金もださない」戦略が陸軍から主張され、満州事変が周到に計画された。日本は、満州事変を「条約を守る国」対「条約を守らない国」という論理で説明し、国際法の権威のもとに相手の非理を追及していこうとする原理主義的姿勢をとった。
- (5) こうした姿勢の日本にとって、リットン調査団の報告と国際連盟総会におけるその採択は、日本の期待を裏切るもので、正しく行動してきたものが不当な扱いを受けたという怒りは大きく、日中戦争・太平洋戦争を準備する国民的な心性が形成することになった。
 - a. ソ連の五ヵ年計画の成功は対ソ戦への危機感を高め、日本は国防態勢の確立と重化学工業化を急いだ。しかし、それは対中貿易の不振で進展せず、日本は国民政府へ軍事的圧力をかけた。そうしたなか日中の偶発的軍事衝突が起き日中戦争へ拡大していった。
 - b. 日中戦争は「東亜新秩序に反対する中国とそれを応援する列強」対「東亜新秩序を樹立しようとする日本」というイデオロギー的色彩の強い論理で説明されたが、こうした論理はアメリカの対日政策を硬化させ、日本は「アメリカとの貿易か、南進か」という選択を迫られ、南進を決意した。ここに「大東亜新秩序に反対する中国とそれを応援する列強」対「大東亜新秩序を樹立しようとする日本」という論理が狂信的に強められ、これを大前提に太平洋戦争が決断される。
- (6) 近代日本は戦争によって直面する問題を解決したが、それはまた新しい問題を生み出すことになり、その解決のためにまた新しい戦争をすることになった。こうして近現代日本は80年間に多くの戦争を行いながら、新興弱小国→後発帝国主義国家→超大国という道を歩んできた。近現代日本の外交には確固たる理想はなく、その時々々の直面する現実を大前提に現実主義的・機会主義的に戦争が決断されてきたが、太平洋戦争は狂信的なまでに強められたアジア主義的イデオロギーが先行して引き起こされた。

4. 小単元の展開

【パートI：“新興弱小国家”日本の課題と針路】(紙幅の関係で割愛)

【パートII：明治国家の課題と日清・日露戦争】

| | 発問 | 教授・学習活動 | 資料 | 生徒から引き出したい知識 |
|----|--------------------------------|-------------------------|----|--------------|
| 導入 | ◎なぜ日本は日清戦争をしたのだろうか、その目的は何だろうか。 | T：学習課題を提示。 P：学習課題を確認 | | |

| | | | |
|------------------------------|---|--|---|
| <p>展開1 日本の「利益線」と日清戦争</p> | <p>○日本を取り巻く国際情勢を確認しておこう。</p> <p>・こうした情勢に取り巻かれた日本の課題は何だったか。</p> <p>○当時、日本の安全保障にとって一番不安な地域はどこだろうか。</p> <p>・なぜ、そう考えられていたのだろうか。</p> <p>・日本にとって、朝鮮などのようにとらえられていたのだろうか。</p> <p>○日本には、こうした情勢に対応できる力があつたのだろうか。</p> <p>○日本の「利益線」を阻害するもとなる可能性のある国はどこだろうか。</p> <p>・清国に対する武力行使は、すぐに実行されたのだろうか。</p> <p>・軍備完整まどなっていたのだろうか。</p> <p>・問題は軍備完整だけだろうか。</p> <p>○日清戦争はどのように始まったのだろうか。</p> <p>・「利益線」の阻害といえるだろうか。</p> <p>・では、そうした「現実」をふまえて、日清戦争はどのような論理で説明されたか。</p> <p>・福沢諭吉は、それをどのようにしているか。</p> | <p>T: モデル図にまとも、確認させる。 P: 確認する。</p> <p>T: 発問する。 P: 答える。</p> <p>T: 発問する。 P: 答える。 T: モデル図で説明する。 P: 確認する。 T: 資料を提示し、発問する。 P: 答える。</p> <p>T: 説明する。 P: 確認する。</p> <p>T: 発問する。 P: 答える。 T: 説明する。 P: 確認する。</p> <p>T: 発問する。 P: 答える。 T: 説明する。 P: 確認する。</p> <p>T: 発問する。 P: 答える。 T: 説明する。 P: 確認する。</p> <p>T: 発問する。 P: 答える。 T: 説明する。 P: 確認する。</p> <p>T: 発問する。 P: 答える。 T: 説明する。 P: 確認する。</p> <p>T: 発問する。 P: 答える。 T: 説明する。 P: 確認する。</p> <p>T: 発問する。 P: 答える。 T: 説明する。 P: 確認する。</p> <p>T: 発問する。 P: 答える。 T: 説明する。 P: 確認する。</p> <p>T: 発問する。 P: 答える。</p> | <div data-bbox="877 235 1189 414" style="border: 1px solid black; padding: 5px; margin-bottom: 10px;"> </div> <p>・清国と朝鮮は宗属関係ある。また、英露両国はアフガニスタン方面で対立しており、ロシアは朝鮮への進出をねらっている。</p> <p>・弱小新興国である日本の安全保障を、いかに確保するかが最大の課題であった。</p> <p>・朝鮮半島。</p> <p>・清国が宗属関係にある朝鮮に影響を強めることは、英露の対立にまきこまれ、英露に朝鮮進出のきっかけを与えることになりかねず、それは日本の安全保障にとって問題であった。</p> <p>①</p> <p>・朝鮮は日本にとって「利益線」（「主権線」の安全に密接な関係のある隣接地域）と考えられていた。</p> <p>・「利益線」の考え方は、明治憲法の構想に助力したシュタインから学んだもので、「利益線」はどこの国の影響も支配も受けず、中立が守られねばならず、それが危くなったとき、武力行使がおこなわれることになる。</p> <p>・なかったのではないか。</p> <p>・明治国家の直轄軍は、最初、薩長土による御親兵約1万にすぎず、軍備拡張は喫緊の課題であった。</p> <p>・第一に清国、そしてロシア、イギリス。</p> <p>・軍備や軍事費が確保されなければならない。</p> <p>②</p> <p>・普仏戦争が引き合いに出され、軍備拡張の損得が説明された。</p> <p>・軍備拡張は、民権派の主張とも対立するものではなく、着々進められた。</p> <p>・軍備完整のみならず、有力同盟国を持たない新興弱小国である日本は、戦争の相手国のみならず、英露など列強の思惑にも細心の注意を払わねばならないという難しさもあった。</p> <p>・朝鮮で起きた甲午農民戦争をきっかけに勃発した。</p> <p>・甲午農民戦争に対し清国は朝鮮に派兵したが、日本も朝鮮に派し、さらに清国に対し共同討伐と朝鮮内政の共同改革を提案した。しかし、清国はこれを拒否し開戦となった。</p> <p>・清国の行動は、朝鮮の中立を危うくするもので、日本にとっては「利益線」の阻害である。</p> <p>・これが「日清戦争の理由」の大前提としての「現実」である。</p> <p>③</p> <p>・日本の「共同内政改革提案」を清国が拒否したことにより、清国は「改革を拒絶する国」とされた。</p> <p>・福沢諭吉は「文明開化の進歩を妨げんとする」といって、日清戦争を「開化と保守」という論理で捉えている。</p> |
| <p>展開2 一文</p> | <p>○日清戦争の目的は、達成されたのだろうか。</p> <p>・日本は、清国に朝鮮の独立を認めさせるだけでなく、朝鮮にさらに支配力を及ぼすことはできなかったのだろうか。</p> | <p>T: 発問する。 P: 答える。 T: 説明する。 P: 確認する。</p> <p>T: 発問する。 P: 答える。</p> | <p>・清国は朝鮮を自主独立の国であると認めた。</p> <p>・清国と朝鮮との宗属関係は解消され、日本の「利益線」は確保された。</p> <p>・有力同盟国を持たない弱小新興国である日本は、英露など列強にも細心の注意を払わねばならず、そうしたことはかえって日本の「利</p> |

| | | | | | | | | | | | | |
|---------------------|---|--|---|--|------|------|------|-----------|-----------|------|---------|-------|
| <p>明と野蛮の戦いー日露戦争</p> | <p>○日清戦争後、日本を取り巻く国際情勢に変化はなかったか。 ・日本の勝利によって最も大きな影響を受ける国はどこだろうか。 ・なぜロシアは影響を受けるのだろうか。 ・ロシアはどうしたのだろうか。 ・こうしたロシアの動きに対して、反発する国はなかっただろうか。 ・こうした露英の動きに対して、どのような反応があったのだろうか。 ○こうした動きは、日本にとってどういう意味があったのだろうか。 ○そうした状況の中、日本はすぐにロシアと開戦したのだろうか。 ・開戦の条件は、どのように整えられたのだろうか。 ○ロシアとの対立は、どのような論理で説明されたのだろうか。吉野作造はどのようなことを主張しているか。</p> | <p>T: 考えさせる。 P: 考える。 T: 発問する。 P: 答える。 T: 説明する。 P: 確認する。 T: 説明する。 P: 確認する。 T: 発問する。 P: 答える。 T: 説明する。 P: 確認する。 T: 説明する。 P: 確認する。 T: 説明する。 P: 確認する。 T: 発問する。 P: 答える。 T: 説明する。 P: 確認する。 T: 資料を提示し、 発問する。 P: 答える。 T: 説明する。 P: 確認する。</p> | <p>益線」を危うくすることになる。</p> <p>・ロシア。 ・日本の朝鮮への影響が強まれば、ロシアが太平洋へ出る道は鎖されてしまう。 ・ロシアは清国の賠償を支援し、清国に排他的な勢力範囲を獲得していった。</p> <p>・ロシアと対立していたイギリスが反発するだろう。 ・イギリスはロシアの動きに対して、対清政策を「門戸開放の維持」から「勢力範囲の確保」へ転換した。 ・アメリカは海軍にかかわる英人の利害を代弁し、門戸開放宣言を出した。 ・当時貿易(対満州、朝鮮)に拠る経済成長を実現していた日本にとって、米国の門戸開放宣言は十分に支持できるものであったが、ロシアの「勢力範囲確保」は致命的な危機で、日本とロシアとの対立は決定的となった。</p> <p>・対立は決定的となったが、条件が整わなければ開戦は決断できない。 ・軍備完整(陸軍19個師団計60万人、海軍6・6艦隊15万ト)、戦費の調達(増税、内外からの公債)が周到にこなされ、日英同盟を締結したことにより日清戦争のように列強への注意を気にかける必要もなくなった。</p> <p>・吉野作造は、貿易の門戸開放をしない国を非文明国としている。 ・ロシアは「文明の敵」とされ、日露戦争は「文明と野蛮」の戦いという論理で説明された。</p> | | | | | | | | | |
| <p>終結</p> | <p>○明治国家が直面した現実とは、何であったか。 ○日清戦争、日露戦争をおこなった理由を、それぞれ現実と理想の視点から整理してみよう。</p> | <p>T: 発問する。 P: 答える。 T: 整理させる。 P: 整理する。 T: 説明する。 P: 確認する。</p> | <p>・明治国家は「新興弱小国として、いかにして国の安全保障を確保するか」という現実を直面した。</p> <table border="1" data-bbox="805 1176 1428 1265"> <tr> <td></td> <td>現実主義</td> <td>理想主義</td> </tr> <tr> <td>日清戦争</td> <td>日本の利益線の確保</td> <td>開化(改革)と保守</td> </tr> <tr> <td>日露戦争</td> <td>門戸開放の維持</td> <td>文明と野蛮</td> </tr> </table> <p>・いずれの戦争の理由も、その時々の「現実」を大前提に、「理想」が理屈づけられ説明されている。一つの戦争は直面する「現実」を理由になされたが、それはまた新しい「現実」を生み出し、新たな戦争を引き起こされた。</p> | | 現実主義 | 理想主義 | 日清戦争 | 日本の利益線の確保 | 開化(改革)と保守 | 日露戦争 | 門戸開放の維持 | 文明と野蛮 |
| | 現実主義 | 理想主義 | | | | | | | | | | |
| 日清戦争 | 日本の利益線の確保 | 開化(改革)と保守 | | | | | | | | | | |
| 日露戦争 | 門戸開放の維持 | 文明と野蛮 | | | | | | | | | | |

【パートⅢ：「国運の天佑」第一次世界大戦と大戦後の課題】

| | | | |
|-------------------|--|--|---|
| <p>導入</p> | <p>○日露戦争は何をもたらしたのだろうか。 ・資料①から、どういうことがわかるか。 ・なぜ怒っているのだろうか。 ○日露戦争後、日本はどんな問題に直面することになったか。 ◎それらの課題を抱えた日本は、この後どうなったのだろうか。</p> | <p>T: 考えさせる。 P: 考える。 T: 資料を提示し、 発問する。 P: 答える。 T: 説明する。 P: 確認する。 T: 説明する。 P: 確認する。 T: 学習課題を提示する。 P: 確認する。</p> | <p>①</p> <p>・日本は一躍弱小新興国から後発ではあるが帝国主義国家に脱皮した。 ・戦争の成果を台無しにしたことに対する人々の怒り。 ・日露戦争は当初の見積もり(1年で終結4億5千万)をはるかにこえる戦費(約20億)を費やし、国民はその負担に耐えたが、その成果が台無しになったことに怒っている。 ・膨大な戦費負担による国家財政の窮迫、獲得した中国權益をどう守るか、というような問題に直面した。</p> |
| <p>展開1 (一) 国運</p> | <p>・日露戦争後、国際関係にはどういった変化があらわれたか。 ◎第一次世界大戦は、日本にとってどういう意味を持った戦争だったか。 ○第一次世界大戦に対して、日本はどうしたか。</p> | <p>T: 発問する。 P: 答える。 T: 学習課題を提示。 P: 確認する。 T: 発問する。 P: 答える。 T: 説明する。</p> | <p>・英仏露(三国協商)と独奥伊(三国同盟)の対立が、先鋭化し、第一次世界大戦が勃発した。 ・日英同盟により参戦した。 ・同盟による参戦の義務はなく、イギリスは日本に英商船の保護を要</p> |

| | | | | | | | | | |
|---------------------|--|--|---|--|------|------|------|------------|-----------|
| <p>の天祐「第一次世界大戦」</p> | <ul style="list-style-type: none"> ・参戦の義務も要請もない戦争に、日本はなぜ参戦したのだろうか。 ・大戦への参戦を、現実主義と理想主義の視点からまとめるとどうなるか。 ・その目的のため、どのようなことが行われたのだろうか。 ・それは成功したのだろうか。 ・パリ講和会議では、日本は何を要求したか。 ・それらはどうなったのだろうか。 ・大戦参戦の成果はあったといえるだろうか、大戦は日本に何をもたらしたのだろうか。 | <p>P: 確認する。 T: 資料を提示し、発問する。 P: 答える。</p> <p>T: 整理させる。 P: 整理する</p> <p>T: 説明する。 P: 確認する。</p> <p>T: 説明する。 P: 確認する。 T: 説明する。 P: 確認する。</p> <p>T: 説明する。 P: 確認する。 T: 発問する。 P: 答える。</p> <p>T: 説明する。 P: 確認する。</p> | <p>請していたにすぎず、日英同盟は参戦の口実にすぎない。</p> <p>②</p> <table border="1" data-bbox="813 358 1428 414"> <tr> <td></td> <td>現実主義</td> <td>理想主義</td> </tr> <tr> <td>一次大戦</td> <td>中国問題の解決の好機</td> <td>(日英同盟の情誼)</td> </tr> </table> <ul style="list-style-type: none"> ・第一次世界大戦は、日露戦争後の懸案の一つであった中国問題の解決の好機(「天祐」), ととらえられている。 ・参戦の見返りとして、中国や南洋諸島のドイツ根拠地の支配権の獲得を連合軍に認めさせること、中国に日本の要求(対華21ヶ条の要求)を認めさせること、の2つのことが行われた。 ・列強からの承認の確保や中国への圧力など帝国主義的外交によって達成をめざしたが、決着をパリ講和会議に持ち越された。 ・大戦参戦の成果である(A)旧独領南洋群島の処理問題と(B)山東省利権の継承問題に、(C)人種差別撤廃問題を加えた3つを要求した。 ・(B)は難航したが、(A)とともに一応日本の主張は通りになり、(C)は実現しなかった。 ・大戦参戦の成果である(A)(B)については望み通りにいったのだから、成果はあったといえる。 ・大戦により輸出が急速に拡大し、日本は劇的に債務国から債権国に転換し、財政問題も好転した。大戦は日本にとって「天祐」だった。 | | 現実主義 | 理想主義 | 一次大戦 | 中国問題の解決の好機 | (日英同盟の情誼) |
| | 現実主義 | 理想主義 | | | | | | | |
| 一次大戦 | 中国問題の解決の好機 | (日英同盟の情誼) | | | | | | | |
| <p>展開2(大戦後の課題)</p> | <ul style="list-style-type: none"> ◎大戦がもたらしたものは、ほかにはないだろうか、講和会議の経過と決着は、日本の予想した通りだったのだろうか。 ・(B)は、なぜ難航したのだろうか。 ・(C)とは、どういう問題だろうか。 ・(C)は、なぜ実現できなかったのだろうか。 ・(B)の難航や(C)の失敗は、どういうことを意味しているだろうか。 ・松岡洋右は、講和条約の交渉をどのように見ていたか。 ◎これらのことから、大戦が日本にもたらしたものとして、どういうことをあげることができるか。 ・新しい外交としてどんなやり方があるだろうか。資料では、参謀本部は移民問題に対して、どういう姿勢を主張しているか。 | <p>T: 考えさせる。 P: 考える。</p> <p>T: 説明する。 P: 確認する。 T: 説明する。 P: 確認する。</p> <p>T: 説明する。 P: 確認する。 T: 発問する。 P: 答える。</p> <p>T: 資料を提示し、発問する。 P: 答える。</p> <p>T: 説明する。 P: 確認する。 T: 発問する。 P: 答える。 T: 説明する。 P: 確認する。</p> <p>T: 資料を提示し、発問する。 P: 答える。</p> <p>T: 説明する。 P: 確認する。</p> | <p>③</p> <ul style="list-style-type: none"> ・中国やアメリカが強硬に反対し、大戦中に日本が中国と締結した諸条約の正当性が疑われ、日本は孤立した。 ・人種による国家の差別(人間の差別ではない)の撤廃を国際連盟規約に入れようとするもので、それにより、日本は移民問題の解決、国際連盟が反黄色人種的政治同盟となることの防止をめざした。 ・国際条約にうったえようとする日本の要求は、内政干渉であるとしてアメリカが強硬に反対し、対米関係は悪化した。 ・大戦後、日本の国際社会において大変困った立場に立つことになり、大戦後は不安がいっぱいだった。 ・松岡は日本外交を「野暮」, “special pleading” であると批判している。 ・これまでの日本がとった帝国主義的外交の限界を指摘している。 ・アメリカとの関係の悪化、日本の国際的な孤立化の気配という新たな問題が生じ、これまでの帝国主義的外交の限界も見え始めた。 ・大戦は一つの問題を解決したが、日米対立という別の問題を生み出した。また、これまでの日本の帝国主義的な現実主義の外交にも問い直しが必要とされた。 <p>④</p> <ul style="list-style-type: none"> ・アメリカの排日移民法(24年)について、国際連盟に付議しても、国際法の威厳を守れと述べている。 ・国際法の威力により徹底的に相手の非理を暴き日本に対する姿勢を変えさせていこうとする原理主義的な姿勢が萌芽してきたことを示している。 | | | | | | |
| <p>終結</p> | <ul style="list-style-type: none"> ○日本が第一次世界大戦に参戦した理由は何か。 ○第一次世界大戦は、日本にとってどう意味をもったか。 | <p>T: 発問する。 P: 答える。</p> <p>T: 発問する。 P: 答える。</p> | <ul style="list-style-type: none"> ・日本には参戦の義務も要請もなかったが、これを「天祐」ととらえ、日英同盟を口実に積極的に参戦した。 ・第一次世界大戦は、実際に、日露戦争後の諸問題を解決する「天祐」となったが、大戦後、日米関係の悪化、日本の国際的な孤立化の懸念という新たな課題が着起するとともに、これまでの外交のやり方も問い直されるようになった。 | | | | | | |

【パートIV: 「不安」な戦後から満州事変へ】

| | | | |
|-----------|---|---|---|
| <p>導入</p> | <ul style="list-style-type: none"> ○大戦後の日本の外交課題は何だったのだろうか。 | <p>T: 発問する。 P: 答える。 T: 説明する。 P: 確認する。</p> | <ul style="list-style-type: none"> ・対米関係の悪化、国際的な孤立化の懸念。 ・大戦後の日本は、国際的に不安いっぱいだった。 |
|-----------|---|---|---|

| | | | |
|--------------------------|--|--|--|
| | <p>○大戦後の国際情勢はどうだっただろうか。</p> <p>◎そうしたなか、日本はどのような道を歩んだのだろうか。</p> | <p>T：説明する。 P：確認する。 T：学習課題を提示する。 P：確認する。</p> | <p>・国際協調と軍縮が主流となった。</p> |
| 展開1 (「不安」な戦後) | <p>○日本はアメリカをどのように考えたか。</p> <p>○アメリカとの戦いは、どういうものになると予想されたか。</p> <p>・経済封鎖に耐え総力戦を戦い抜く体制の準備は、日本にできたのだろうか。</p> <p>○資源小国日本は、国際協調と軍縮の思潮の中でどうしたのだろうか。</p> <p>・それは本当なのか。</p> <p>・短期決戦構想とは、どういうものか。</p> <p>・この構想はうまくいったのだろうか。</p> <p>・それは何か。</p> <p>・それはどういうことか。</p> <p>○このことから、ロンドン軍縮条約は、日本に何をもたらしたといえることができるか。</p> | <p>T：説明する。 P：確認する。 T：説明する。 P：答える。</p> <p>T：発問する。 P：答える。</p> <p>T：説明する。 P：確認する。</p> <p>T：発問する。 P：答える。</p> <p>T：説明する。 P：確認する。</p> <p>T：説明する。 P：確認する。 T：資料を提示し、発問する。 P：答える。 T：説明する。 P：答える。</p> <p>T：発問する。 P：答える。</p> | <p>・大戦後、日本は第一の仮想敵国としてアメリカを想定するようになる。</p> <p>・大戦の教訓から、これからの戦争は「総力戦」となり、経済封鎖が決定的な意味を持つと予想された。アメリカとの戦いもそのように予想された。</p> <p>・日本は資源小国で、膨大な費用を伴うその準備は容易なことではなく、たちまちにはできない。</p> <p>・戦後、世界には国際協調と軍縮の機運が高まっており、国内的にもデモクラシー状況が進展していた。それらを無視して、そうした体制の準備をすることはできなかった。</p> <p>・日本は、国際協調と軍縮の思潮を無視することはできず、ワシントン体制のもと幣原外交が展開されたのだろう。</p> <p>・日本は、国際協調と軍縮の枠内で「軍の近代化をはかり、うまく戦えば短期決戦できる」という構想(海軍：加藤寛治)を持った。</p> <p>・海軍は対米7割の補助艦があれば、渡洋する米艦隊をそれで漸減し、その後の主力艦決戦で2年以内に勝負を決することが可能であるとすもの。</p> <p>・この構想の前提に変更をもちたら事態が生じ、構想は破綻した。</p> <p>・1930年のロンドン海軍軍縮条約</p> <p>・ロンドン会議では、大型巡洋艦対米7割を主張する日本に対し、アメリカは6割を要求し、最終的に押し切られてしまった。これにより日米戦争の日本の勝算はなくなり、国家の安全は脅威にさらされることになった。</p> <p>・短期決戦構想が破綻し、対外的な危機意識が醸成されることになった。</p> |
| 展開2 (ロンドン軍縮条約から満州事変へ) | <p>○ロンドン軍縮条約がもたらした国家の安全の脅威に対して、日本はどうしただろうか。</p> <p>・それはどういう戦略だろうか、資料で確認してみよう。</p> <p>・この方針はどういう事態を招いただろうか。</p> <p>・満州事変の理由を、日本が直面した現実という視点から説明してみよう。</p> <p>○満州事変はどのように理屈づけられたのだろうか。</p> <p>・次の資料は、満州事変の理由をどのように主張しているか。</p> <p>・日本は、中国をどのような論理で捉え、満州事変を説明しようとしたか。</p> | <p>T：発問する。 P：答える。 T：資料を提示し、発問する。 P：答える。</p> <p>T：説明する。 P：確認する。 T：発問する。 P：答える。 T：説明する。 P：確認する。</p> <p>T：発問する。 P：答える。</p> <p>T：説明する。 P：確認する。 T：資料を提示し、発問する。 P：答える。</p> <p>T：説明する。 P：確認する。 T：発問する。 P：答える。</p> | <p>②</p> <p>・新しい戦略が練られただろう。</p> <p>・中国を根拠地として戦争を続けられ、戦争によって戦争を養うことができ、「一厘の金も出させない」でアメリカとの戦争に向かうことができるという戦略が陸軍(石原莞爾)から出てきた。</p> <p>・対外的な危機意識が醸成されるなか、「一厘の金も出さない」戦争という考え方は、人々の意識の中に入っていくやすいものだった。</p> <p>・満州事変を招来することになった。</p> <p>・1931年9月、関東軍は奉天郊外の柳条湖で満鉄の線路を爆破し、これを中国軍の仕業として軍事行動を開始し、満州全土を支配下に置き、32年3月満州国を建国させた。これに対し、中国国民政府は国際連盟に提訴し、リットン調査団が送られた。</p> <p>・満州事変は、ロンドン軍縮条約がもたらした日本の安全の脅威という現実に対して実行されたものである。</p> <p>・日本が「一厘の金も出さない」戦争をアメリカと行うためには、満蒙が必要であり、ソ連が弱体化するうちに北満州までとっておけば、ソ連はしばらく出て来れないという見通しで、関東軍はこれを周到に準備した。</p> <p>③</p> <p>・中国の対日ボイコット問題について、それは日本の不法行為に対する復讐ではなく、日本の行為は中国の条約違反の不法行為に対する日本の権利の自衛として行ったものである、と主張している。</p> <p>・日本は、満鉄併行線問題、商租権問題についても、条約で保障された日本の権利が中国によって蹂躪されたことを主張している。</p> <p>・「条約を守らない国」中国、「条約を守る国」日本という論理で説明しようとしている。</p> |

| <ul style="list-style-type: none"> こうした論理だけで十分だろうか。 ○これらの批判に対して、具体的に、どのような説明がなされたのだろうか、資料で確認していこう。 ・不戦条約についてはどうだろうか、資料はどういう方法を説明しているか。 ・国際連盟規約や九カ国条約についてはどうだろうか、資料はどういう方法を説明しているか。 ・以上、日本の理屈づけのをまとめてみよう。 | <p>T : 説明する。 P : 確認する。</p> <p>T : 指示する。 P : 確認する。 T : 資料を提示し、発問する。 P : 答える。</p> <p>T : 説明する。 P : 確認する。 T : 資料を提示し、発問する。 P : 答える。</p> <p>T : 説明する。 P : 確認する。</p> | <p>④</p> <ul style="list-style-type: none"> この論理によれば、予想される国際連盟規約や九カ国条約、不戦条約の違反を論拠とする批判に対応することもできる。 自国の安全に関係のある特定地域に対する自衛行動については、不戦条約締結時に留保している、という論法で対応した。 満蒙新政権樹立は「支那側の自主的発意」に基づく民族自決であり、連盟規約や九カ国条約違反ではない、という論法で対応した。 <p>⑤</p> <ul style="list-style-type: none"> 日本は「条約を守る国」として国際連盟規約や九カ国条約、不戦条約に対応しようとしている。 日本は「条約を守る国」として国際法の威力を信じ、相手の非を暴いていこうとする姿勢が確認できる。移民問題の際に出てきた姿勢が現実となったと見ることができる。 | | | | | | |
|---|---|--|--|------|------|------|-------------------------------------|------------------|
| <p>終結</p> <ul style="list-style-type: none"> ○第一次世界大戦がもたらした外交の課題は、どのように解決されたか。 ○どんな新しい方針が現れたか。 ○満州事変の理由を現実と理想の視点から整理してみよう。 | <p>T : 発問する。 P : 答える。</p> <p>T : 発問する。 P : 答える。</p> <p>T : 整理させる。 P : 整理する。</p> <p>T : 説明する。 P : 確認する。</p> | <ul style="list-style-type: none"> 海軍の主張する「大型巡洋艦対米7割」を大前提として、国際協調と軍縮にあわせた外交が展開されたが、ロンドン軍縮条約でそれは破綻した。 陸軍の「一厘の金も出さない」対米戦争という方針が現れ、満州事変を招来した。 <table border="1" data-bbox="798 851 1455 963"> <thead> <tr> <th></th> <th>現実主義</th> <th>理想主義</th> </tr> </thead> <tbody> <tr> <td>満州事変</td> <td>国際協調と軍縮 対米総力戦への対応(「一厘の金も出さない戦争」)</td> <td>「条約を守る国」と「守らない国」</td> </tr> </tbody> </table> <ul style="list-style-type: none"> 国際法の威力を信じ、相手の非を暴いていこうとする原理主義的な姿勢を確認することができる。 | | 現実主義 | 理想主義 | 満州事変 | 国際協調と軍縮 対米総力戦への対応(「一厘の金も出さない戦争」) | 「条約を守る国」と「守らない国」 |
| | 現実主義 | 理想主義 | | | | | | |
| 満州事変 | 国際協調と軍縮 対米総力戦への対応(「一厘の金も出さない戦争」) | 「条約を守る国」と「守らない国」 | | | | | | |

【パートV：事変後の課題と日中戦争・太平洋戦争】

| | | |
|---|---|--|
| <p>導入</p> <ul style="list-style-type: none"> ○日本の満州事変の理屈づけは、成功したのだろうか。 ・それに対して日本は、どうしただろうか。 ・全面的に認められなかったわけではないのに、なぜ脱退までしたのだろうか。 ◎怒りが供給された日本は、この後どういう道を歩むのだろうか。 | <p>T : 発問する。 P : 答える。 T : 説明する。 P : 確認する。</p> <p>T : 資料を提示し、発問する。 P : 答える。 T : 説明する。 P : 確認する。</p> <p>T : 学習課題を提示する。 P : 確認する。</p> | <p>①</p> <ul style="list-style-type: none"> 成功せず、リットン調査団の報告が国際連盟総会で採択された。 調査団報告書は、日中の双方の主張を認めた内容で、経済的権益の侵害については日本の主張をほぼ認めたが、満州国独立は認めず、日本の思い通りのものではなかった。 国際連盟を脱退した。 日本は調査団報告を国際法の威嚇が試される場と考え期待していたので、国際法に則って正しく行動してきたものが不当な扱いを受けたという怒りは大きかった。 <p>(こうした怒りが、日中戦争～太平洋戦争を準備する国民的な心性を形成することになる。)</p> |
| <p>展開1 (事変後の新たな課題と日中戦争)</p> <ul style="list-style-type: none"> ○国際連盟脱退後、日本は国際的にどうなったのだろうか。 ・日本は本当に孤立化していったか。 ・日米関係はどうなったのだろうか。 ・なぜ、日米関係が維持されたのだろうか。 ○国際連盟脱退後の日本には、大きな問題は起こらなかったのだろうか。 ・これに対して日本はどうしたか。 ・それはうまくいっただろうか。 ・日本はどうしたか。 | <p>T : 発問する。 P : 答える。 T : 説明する。 P : 確認する。 T : 説明する。 P : 確認する。 T : 発問する。 P : 答える。</p> <p>T : 説明する。 P : 確認する。 T : 説明する。 P : 確認する。 T : 説明する。 P : 確認する。 T : 説明する。 P : 確認する。</p> | <ul style="list-style-type: none"> 国際的に孤立化していったのではない。 日本は、二国間の協調を個別に積み重ねる外交方針をとり、たちまち孤立化はしなかった。 日米の経済関係は意外にも良好で、日米関係は決して破綻してはならず、日本はたちまちには孤立していなかった。 アメリカは互惠通商協定法(34年)と中立法(35年)によって対外関係を律していたが、多くの資金や原材料をアメリカに頼っていた日本は、それらの法に自らのメリットがあったので、日米関係に急激な変化は起こらなかった。 第一次五ヶ年計画に成功し、第二次五ヶ年計画を推進するソ連の軍事力は驚異的に強化され、対ソ戦への危機感が高まった。 対ソ戦を可能とする国防態勢の確立を急がなければならない日本は、5年間戦争をせず、日満両国の重化学工業化を推進しようとした。 満州を傀儡化した日本に対する中国の対抗的ボイコットと保護主義的関税政策により対中貿易が半減し、重化学工業化が進まなかった。 蒋介石の全国統一に妨害を加えることによって、国民政府の対日政策を親日的なものに変えようと軍事力で圧力をかけたが、こうした |

の勃発)

○これに対し、アメリカはどうしただろうか。

・アメリカは、本当に中立法を発動したのだろうか。

・日本は、アメリカの中立法発動についてどう考えていたのだろうか。

○以上のことから、日中米の関係をモデル図にしてみよう。

・日中戦争はどんな戦争かまとめてみよう。

T: 発問する
P: 答える。

T: 説明する。
P: 確認する。

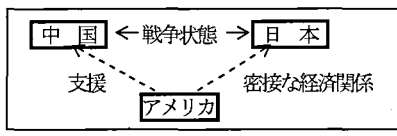
T: 説明する。
P: 確認する。

T: 確認させる。
P: 確認する。
T: 指示する。
P: まとめる。

T: 説明する。
P: 確認する。

なか偶発的に蘆溝橋で日中の軍事衝突が起き(37年)、日中全面戦争へと拡大した。

- ・中立法により日本を牽制し、戦争拡大を思いとどませようとするのではない。
- ・アメリカが中立法を発動すると、一方の当事者である中国に対して支援できなくなるのみならず、アメリカ船舶は日本の臨検を受け、戦時禁制品を没収されることになる。そこで、アメリカは中立法は宣言しなかったし、中国もその方がよかった。
- ・アメリカが中立法を発動すればアメリカとの経済的絆が切れてしまうので、交戦国に認められた権限は行使できないというデメリットはあるが、日本は宣戦布告をしないことにした。それによって、不戦条約違反との批判も避けることができた。
- ・日本、中国、アメリカのいずれの国もそれを戦争と呼まないことに利益を見出した「宣戦布告なき明らかな戦争状態」であるといえる。



・日米関係は日中戦争によってたちまち危機的な状況になったわけではない。こうした奇妙な戦争状態が4年以上も続き、1940年初頭までに日本は中国に85万人を投入し、20万人の戦死者を出した。

展開2 (日中戦争の論理と太平洋戦争)

○偶発的に始まった戦争を、なぜそこまで続けることができたのか。その目的はどのような論理で説明されたのだろうか。

・次の資料では、日本政府はそれをどのように説明しているか。

・日本の「東亜新秩序」の主張には、どういう意味があるだろうか。

・この文章に使われている言葉をみて、何か気づくことはないか。

○日中戦争の理由を現実と理想の視点から整理してみよう。

○こうした論理が持ち出された時、アメリカはどうしただろうか。

・アメリカの政策転換により、日本はどうなるだろうか。

・日本はどうしただろうか。

○日本はなぜ南進を決意したのだろうか。

・南進を妨げようとする国は、どこだろうか。

・それらの国に対して、日本はどのような対策をとったか。

・三国同盟は、そのことをどのように説明しているか。

・資料②と③を比較して、何か気がつくことはないか。

T: 考えさせる。
P: 考える。

T: 資料を提示し、発問する。
P: 答える。

T: 説明する。
P: 確認する。

T: 発問する。
P: 答える。
T: 説明する。
P: 確認する。

T: 整理させる。
P: 整理する。

T: 説明する。
P: 確認する。
T: 発問する。
P: 答える。
T: 説明する。
P: 確認する。

T: 発問する。
P: 答える。
T: 資料を提示し、発問する。
P: 答える。

T: 発問する。
P: 答える。

T: 発問する。
P: 答える。

- ・…。
- ②
- ・日本がめざすものは「東亜永遠の安定を確保すべき新秩序の建設」で、「日滿支三国」の関係樹立を根幹とする。
- ・東アジアの地域主義的秩序のことで、それを認めようとするのが中国のナショナリズムで、それを後援しているのが西欧帝国主義であるという含意がある。
- ・現実離れをした言葉が使用されている。
- ・イデオロギー的、思想的色彩を帯びた言葉が使用されている。

| | 現実主義 | 理想主義 |
|------|-------|---|
| 日中戦争 | ソ連の脅威 | 「東亜新秩序」に反対する中国とそれを応援する西欧列強 対 「東亜新秩序の樹立をめざす日本」 |

- ・理想による理屈づけの論理はイデオロギー的傾向を帯びたものであった。
- ・これまでのような経済関係を維持できるはずはない。
- ・1938年以降、アメリカは対日政策を方向転換し、制裁的手段で日本に対する圧力を強化するようになった。
- ・アメリカとの経済的関係が切れ、日本は窮するようになる。
- ・それを打開するため、東南アジアの資源確保をめざす。
- ・日本は「アメリカとの貿易か、南進か」という選択を迫られ、南進を選択した。
- ・当時、東南アジアにおけるヨーロッパの植民地は、ヨーロッパ情勢(第二次世界大戦勃発、ドイツの伏魔撃)の影響で、その支配体制は弱体化したり手薄になったりしていた。そうしたヨーロッパの情勢が、日本の南進に影響しているといえる。
- ③
- ・アメリカとイギリス。
- ・ドイツ、イタリアと組んで米英の妨害を阻止しようとし、三国同盟を結んだ。
- ・独伊は日本に対し「大東亜に於ける新秩序建設に関し指導的地位を認め且つ之を尊重」し、アメリカが攻撃した時には「あらゆる政治的、経済的及び軍事的方法に依り相互に援助す」としている。
- ・「東亜新秩序」が、「大東亜新秩序」となっている。

| | <p>○「大東亜新秩序」の樹立を進めると、何が起きるだろうか。</p> <p>○太平洋戦争の理由を理想と現実の視点からまとめてみよう。</p> | <p>T：説明する。 P：確認する。</p> <p>T：発問する。 P：答える。 T：説明する。 T：整理させる。 P：整理する。</p> | <p>・日滿支の「東亜」から東南アジアを含む「大東亜」に変わっているが、こうした捉え方には、世界が3、4のブロックに分かれているとするドイツの地政学的国際観がある。</p> <p>・アメリカ、イギリスとの戦争。 ・太平洋戦争を引き起こすことになる。</p> <table border="1" data-bbox="810 434 1430 555"> <thead> <tr> <th></th> <th>現実主義 ←</th> <th>→ 理想主義</th> </tr> </thead> <tbody> <tr> <td>太平洋戦争</td> <td>米英が日本の南進を妨害</td> <td>「大東亜新秩序」に反対する中国とそれを応援する西欧列強 対 「大東亜新秩序の樹立をめざす日本」</td> </tr> </tbody> </table> <p>T：説明する。 P：確認する。</p> <p>・太平洋戦争は「大東亜新秩序」の樹立という理想が先行して引き起こされたもので、これまでの諸戦争のような現実を大前提にそれを理想で理屈づけるという仕方とは異なっている。</p> | | 現実主義 ← | → 理想主義 | 太平洋戦争 | 米英が日本の南進を妨害 | 「大東亜新秩序」に反対する中国とそれを応援する西欧列強 対 「大東亜新秩序の樹立をめざす日本」 |
|-------|---|---|--|--|--------|--------|-------|-------------|---|
| | 現実主義 ← | → 理想主義 | | | | | | | |
| 太平洋戦争 | 米英が日本の南進を妨害 | 「大東亜新秩序」に反対する中国とそれを応援する西欧列強 対 「大東亜新秩序の樹立をめざす日本」 | | | | | | | |
| 終結 | <p>○なぜ日本は日中戦争を起こしたのだろうか。</p> <p>○なぜ日中戦争は太平洋戦争へと続いていったのだろうか。</p> | <p>T：発問する。 P：答える。</p> <p>T：発問する。 P：答える。</p> | <p>・国際連盟脱退後、日本が直面する課題は、五カ年計画を進め強化していくソ連の脅威だった。日本は、ソ連の脅威に対する国防態勢の確立を急ぎ、重化学工業化を進めたが、対中貿易の不振で思うように進まず、それを打開するため中国に圧力をかけたが、そうしたなか日華事変が偶発的に勃発した。偶発的に始まった戦争は、「東亜の新秩序」樹立という現実離れしたイデオロギー的色彩の強い主張で理屈づけられた。</p> <p>・「東亜の新秩序」樹立という日本の主張はアメリカを刺激し、日米は対立した。アメリカとの経済関係が切れ資源確保に窮した日本は、独・伊に接近するとともに、「東亜の新秩序」に代わって「大東亜の新秩序」樹立というさらに現実離れしたイデオロギー的色彩の強い新しい理想を掲げ資源を求めて南進し、アメリカとの対立は決定的となった。</p> | | | | | | |

【パートVI：近現代日本の諸戦争の論理と〈戦争プロパガンダ10の原則〉】（紙幅の関係で割愛）

5. 教授資料およびその出典

- I-① 〈山県有朋の「利益線」論〉：加藤陽子『東大式レッスン 戦争の日本近現代史』講談社、2002年、p. 84。
I-② 〈平時の軍事支出の損得〉：前掲I-①、p. 39。 I-③ 〈福沢諭吉「文野の戦争」論〉：前掲I-①、p. 114。
I-④ 〈吉野作造「征露論」〉：前掲I-①、p. 141。
- II-① 〈日比谷焼き打ち事件〉：『新詳日本史 地図 資料 年表』浜島書店、2004年、p. 215。
II-② 〈「天佑」第一次世界大戦〉：前掲I-①、p. 171。 II-③ 〈松岡洋右の「対華二十一ヶ条観」〉：前掲I-①、p. 195。
II-④ 〈排日移民法の対処法〉：前掲I-①、p. 193。
- III-① 〈ロンドン海軍軍縮条約〉：『日本史史料 上』東京法令出版社、昭和48年、p. 598。
III-② 〈石原完爾の「国防方針」〉：前掲I-①、p. 239。 III-③ 〈満州事変の論理〉：前掲I-①、p. 257。
III-④ 〈「不戦条約」違反に対する説得の論理明〉：前掲I-①、p. 250。
III-⑤ 〈「国際連盟規約、九ヵ国条約」違反に対する説得の論理〉：前掲I-①、p. 251。
- IV-① 〈国際連盟の脱退〉：前掲II-①、p. 253。 IV-② 〈日中戦争の論理「帝国政府声明」〉：前掲III-①、p. 676。
IV-③ 〈三国同盟〉：前掲III-①、p. 728。

5. おわりに

本稿では、近現代日本が行った諸戦争について、それらを外交政策としての“行為”と見立て、その論理構造を解明する小単元の教育内容を開発した。戦争を扱う授業は、例えば日露戦争とか、太平洋戦争とか、個別の戦争を取り上げたものが多い。しかし、個別に戦争を取り上げるやり方には、戦争原因の解明という観点から限界を指摘せざるを得ない。それは、近現代日本はその時々直面する問題の解決のために戦争を引き起こしたが、その戦争は一つの問題を解決すると同時に新たな別の問題を招来し、その新たな問題を解決するために、さらに次の戦争が引き起こされているからである。近現代日本

の戦争を主テーマに授業をつくる場合、一つの戦争だけを切り取って授業化することはほとんど意味はない。本稿では、近現代日本が80年間になした6つの戦争を一つの連鎖と見なし、その原因(目的論的説明)を連続的に追究することによって、近現代日本の戦争の論理を解明しようとした。こうした学習により、生徒たちは近現代日本の諸戦争をより深く理解し、戦争責任や戦後責任についてより深い所から捉えることができるようになることが期待される。

本稿で開発した小単元はタイプCの授業であるが、次稿では、さらなる近現代日本の戦争の理解の深化をめざして、タイプBの授業、すなわち、「なぜ日本は戦争を

することができたのか？」を追究する教育内容の開発に取り組み、その授業試案を提示したい。

【註】

- 1) 拙稿「中等歴史教育における「戦争」の教育内容開発 (I)―戦争の原因を解明する歴史授業のあり方―」広島大学附属福山中・高等学校『中等教育研究紀要』第48巻、2008年、pp. 189～196。
- 2) ベティ・リアドン、アリシア・カベスード著、藤田秀雄・浅川和也監訳『戦争をなくすための平和教育―「暴力の文化」から「平和の文化」へ―』明石書店、2005年。
- 3) 様々な形態の社会科として、ここでは、社会認識教育学会編『社会科教育のニュー・パースペクティブ―変革と提案―』(明治図書、2003年) および同『社会認識教育の構造改革―ニュー・パースペクティブにもとづく授業開発―』(明治図書、2006年)の章立てを参考に、科学知にもとづく社会科学科と、社会知にもとづく市民社会科(社会問題科、社会形成科など)に大別して考える。
- 4) 「分析か、反省か、代案か」という観点は、社会科の批判的学習を類型化した池野範男の所論(池野範男「社会科教育における批判の類型―言語論的展開以後のアプローチ―」全国社会科教育学会第51回研究大会発表資料、2002年)に依拠している。新しい「社会科学科」は「事実認識と価値認識の両方にかかわって、それらの構造の分析を通して、社会認識力の育成をめざそうとする」ものである。
- 5) 前掲1)を参照されたい。
- 6) 粟屋憲太郎・田中宏ほか『戦争責任・戦後責任 日本とドイツはどう違うか』朝日新聞社、1994。
- 7) 筆者は、すでにこうしたやり方によって、アメリカの外交を通時的に解明する歴史授業の教育内容開発を行っている。本稿でも、同じやり方で近現代日本の諸戦争について教育内容開発を行う。拙稿「「行為の論理構造を解明する」歴史授業の教育内容開発―「アメリカ外交」の場合―」(広島大学附属福山中・高等学校『中等教育研究紀要』第46巻、2006年)を参照されたい。
- 8) 学習内容の抽出・設定に際しては、加藤陽子らの以下の文献を参考にした。
 - ・入江昭『日本の外交』中央公論社、1966年
 - ・加藤陽子『東大式レッスン 戦争の日本近現代史征韓論から太平洋戦争まで』講談社、2002年
 - ・同『戦争の論理 日露戦争から太平洋戦争まで』勁草書房、2005年
 - ・小林英夫『日本のアジア侵略』山川出版、1998年
 - ・有馬学『日本の近代4 国際化の中の帝国日本』中央公論新社、1999年
 - ・黒野耐『大日本帝国の生存戦略』講談社、2004年
 - ・倉沢愛子・杉原達ほか編『岩波講座 アジア・太平洋戦争 戦争の政治学』岩波書店、2005年。
- 9) 一般に、小前提＝「現実主義」、大前提＝「理想主義」で、大前提→小前提という順序で行為は判断されていく。しかし、近代現代日本の外交政策としての「戦争」では、「現実主義」が大きく作用し、後から「理想主義」が屈折けられていく。図2では、そうした「現実主義」と「理想主義」の順序性を明示するため、「現実主義」や「理想主義」に向かう矢印を太線と細線で区別した。
- 10) 桑原武夫・島田虔次訳(校注)『中江兆民 三酔人経綸問答』岩波書店、2007年。
- 11) アンヌ・モレリ、永田千奈訳『戦争プロパガンダ10の原則』草思社、2002年。アンヌ・モレリは、戦争プロパガンダの一つとして「われわれは領土や覇権のためではなく、偉大な使命のために戦う」という主張をあげている。
- 12) 小単元「近現代日本の諸戦争」の授業試案は、すでに拙稿「「社会を批判する個人」を育成する社会科歴史授業―小単元「近現代日本の諸戦争」―」(全国社会科教育学会『社会科研究』第68号、2008年)において、「社会を批判する個人」を育成する社会科歴史授業の事例として、小単元のパートⅡ～Ⅴを簡略化したものを紹介している。本稿では、紙幅の関係でパートⅠとⅥは割愛したが、パートⅡ～Ⅴについては簡略化しないそのままのものを提示する。